

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

September.2025

No. 68



国内外の高校生世代が競う
「サニックスワールドユース交流大会 2025」
女子セブンズ（7人制）で、
関東学院六浦高等学校女子ラグビー部が
国際大会では初となる優勝を飾りました。
（→ 関連記事 P14）



安全でエコな灯りを貧困地域の子ども達へ届ける カンボジア・ソーラーランタン支援プロジェクト

関東学院大学国際文化学部 柏崎梢准教授のゼミナールが昨年から取り組む
カンボジア支援プロジェクトの内容と、教員や学生の声をご紹介します。

現地を訪問して気づいた 本当に必要な支援のあり方

関東学院大学国際文化学部の柏崎梢准教授のゼミナールは、昨年2月、異文化理解や東南アジアの開発問題を学ぶ一環として、ゼミ合宿でカンボジアを視察訪問しました。参加したのは当時2年生の学生達。柏崎准教授が以前勤めていた大学の教え子がカンボジアで日本語教師をしていることが縁となり、日本語教育の指導を体験したり、文化交流や発表会を行いました。また、カンボジアの中でも貧困率の高いコンボンチュナン州の小学校を訪問。電気が不足している地域のため、支援物資として電池式の簡易ライトを持参しましたが、電池が足りず十分に活用してもらえないという事態が発生します。この経験は学生達に強い印象を残すとともに、「本当に必要な支援とは何か」

を考えるきっかけとなりました。そして、3年生に進級したのを機に始動したのが「カンボジア・ソーラーランタン支援プロジェクト」です。

柏崎准教授は、「光を灯すことができなかった子ども達の顔が忘れられないと、学生達はとてもショックを受けたようです。事前確認や中間報告が足りなかったのではないかなど、様々な反省や振り返りを行う中で、子ども達に安心して安全な灯りを届けようという思いから、このプロジェクトが始まりました」と語ります。

販売数と同じ数のランタンを 学生自ら支援地に届ける

同プロジェクトは、共感型社会貢献事業「Buy One Give One[®]」を展開しているランドポート株式会社と連携し、「CARRY THE SUN[®]」という折り畳み式



CARRY THE SUN[®](税込 4,400 円)
軽量＆コンパクトで防災にも最適



のソーラーランタンを販売する活動です。このソーラーランタンは、一つ購入すると、一つが支援先に届くという製品。太陽光で約7時間充電すると最長72時間点灯し、乾電池不要のため環境にもやさしい製品です。学生達はこれを大学祭や近隣のイベントで販売しようと、計画書の作成、企業へのプレゼン、予算管理を行うとともに、役割分担をしてチラシやポスター作成、SNSでの発信などを行ってきました。昨年11月には大学祭や、産業振興センターで開催された「PIAフェ

スタ」に出店して販売。そして初訪問から1年後の今年2月、ゼミ合宿でカンボジアを再訪した学生達は、販売目標数だった55個を大きく上回る127個のソーラーランタンを現地の子ども達に手渡しました。

4年生の藤澤りりかさんはSNS運営を担当し、活動報告や宣伝活動を行いました。今回の活動で印象に残ったことを尋ねると、「チラシ配りの際に『なぜカンボジアなのか』『他に支援すべき場所があるんじゃないか』という声をいただいた



左から、松岡遼さん(3年)、藤澤りりかさん(4年)、柏崎梢准教授

3年生の松岡遼さんは、高校卒業後に1年間の社会経験を経て、新しいことに挑戦しようと大学に進学。授業で東南アジアに興味を持ち、柏崎ゼミナールに入りました。プロジェクトでは、ポスター制作やイベント時の店舗デザインを担当しています。デザインで心掛けていることを尋ねると、「活動の趣旨を理解していただくこと。そして、ブース内を少し暗くして実際に光っている様子を見てもらうことなどを意識しています。学生一人ひとりが役割を持ち、自分で考えて動いていくのが柏崎ゼミの特徴なので、個人が責任を果たし、一体感を持ってプロジェクトに取り組みたいと思っています」と意欲を語りました。また、カンボジアを訪れたことで、先入観にとらわれずに物事を見る大切さを知ったと話し、「カンボジアは経済的には決して豊か

責任とやり甲斐を感じながら 成長していく学生達

プロジェクトは2年目に突入。今年5月には横浜ベイエリアを中心に開催された「ハマフェスY16」に参加し、メイン会場である山下公園に出店して、ソーランタン41個を販売しました。また、オンラインでの販売も実施。ゼミ生だけでなく他学部の有志学生もプロジェクトに加わるなど、支援の輪が広がっています。

ではないかもしれませんが、僕が実際に見たカンボジアの人達は皆、笑顔で幸せそうでした。幸せって何だろうと考えるきっかけになりましたし、お金では計れない価値を考えて生きていきたいと思いました。今は卒業論文に向け、住み込みでの



関東学院大学 国際文化学部 比較文化学科 准教授

柏崎 梢

神奈川県横須賀市生まれ。東洋大学国際地域学部卒業、アジア工科大学院都市環境マネジメント専攻修了後、東京大学工学系研究科都市工学専攻修了。複数の大学での勤務を経て 2023 年関東学院大学国際文化学部着任。

ファイールドワークを計画しています」と新たな目標に向かっていきます。

柏崎准教授は、学生の成長について、「社会と関わり、皆で困難を克服して達成感を共有することで、絆を深めたり、自律心や挑戦心が増している」と評価。2年目を迎え、去年と同じことをやるのではなく、新たな視点から自分達でプロジェクトを動かしているという実感を持つて取り組み、活動の質を高めていってほしいと期待を寄せました。その上で、「社会連携は、本気でやらないと多くの人に迷惑が掛かってしまいます。学生だからという甘えは許されないと、得るものも大きいので、責任感を共有しながら今後も取り組んでいきたいと思っています」と語りました。柏崎ゼミナールの今後の活動にご注目ください。



◀活動の様子は SNS で発信中



カンボジア支援ランタン販売ページ▶

関東学院高等学校の華道部所属の生徒2名が「全国高校生花いけバトル」全国大会で準優勝

花をいけたいという気持ち大切に、作品性や表現力を競う全国大会に初挑戦して準優勝という快挙を成し遂げた高校生を取材しました。

制限時間わずか5分 即興で花をいけて競う

今年2月、香川県高松市で開催された「第8回全国高校生花いけバトル」全国大会で、関東学院高等学校華道部の岸紗加さんと谷口宗陽さんのペアが準優勝となりました。この大会は、流派や部活動などの枠を超えて、高校生ならではの感性と創造性を花で表現する競技会です。二人一組でエントリーし、今大会は564名(282チーム)の高校生バトラーが参加。全国12か所で地区大会を実施し、各優勝チームが全国大会に進出しました。

この競技は、2〜3チームが同時に、ステージ上に用意された花器と花材を使い、即興で花をいけて得点を競います。制限時間は5分間。花の表情や構成など作品そのものの完成度を評価する「作品点」と、花の扱い方や所作、熱意などを

評価する「表現点」の2項目を審査員が採点し、さらに観客による投票結果も得点に反映されます。

幼なじみのチームワークで 初出場にして全国大会へ

岸さんと谷口さんは、高校2年生だった昨年12月、クイーンズスクエア横浜で行われた神奈川大会で見事優勝。初挑戦にして全国大会への切符を手に入れました。この神奈川大会は、2027年に横浜市で開催される国際園芸博覧会を若い世代と一緒に盛り上げていこうとの思いから、昨年新設された地区大会です。

二人は、のびのびの園から小中高まで一緒という、気心の知れた友達です。花いけバトルに参加したのは、谷口さんのお母さんから「こういう大会があるよ」と勧められたのがきっかけでした。



全国大会の二人の作品はこちらで視聴できます



先鋒戦 26:00 頃～
次鋒戦 1:48:35 頃～

チーム戦 21:30 頃～
準決勝 2:09:55 頃～
決勝 3:03:15 頃～



挑戦する大切さを知り 新たな夢へと向かう

大会を振り返って、谷口さんは「午前中は緊張よりも眠気が勝っていたのですが、勝ち上がるにつれて目が覚めて緊張しました笑」。花いけに初めて挑戦して、全国大会で準優勝までできて、華道部や学校の先生、家族には感謝しかありません。これで、人に言える特技が一つできたかな」と笑顔を見せました。岸さんは、「準決勝で個性的な花器にあたってしまい不安だった時に、客席にいる父が拳で胸をトントンと叩いてサインを送ってくれて、『大丈夫。思いきり楽しもう』と気持ちを持ち直すことができました。準優勝という思いがけない評価をいただき、何事もチャレンジすることの大切さを知りました」と述べました。

最後に、現在高校3年生の二人に今後の目標を聞きました。谷口さんは「農業は今、担い手不足や、お米が足りないなど、いろいろな問題が顕在化していますが、絶対に途絶えさせてはいけないものだし、将来は農業に関わる仕事したいです」とのこと。岸さんは「両親が外国人と交流する姿を見たり、留学生の友達ができただけで、外国人の

花に触れる楽しさと 周囲への感謝を忘れずに

迎えた全国大会は、予選ラウンドから決勝まで約7時間に及ぶ長丁場です。朝から始まった予選ラウンドは、個人作品(先鋒戦・次鋒戦)と共同作品(チーム戦)に

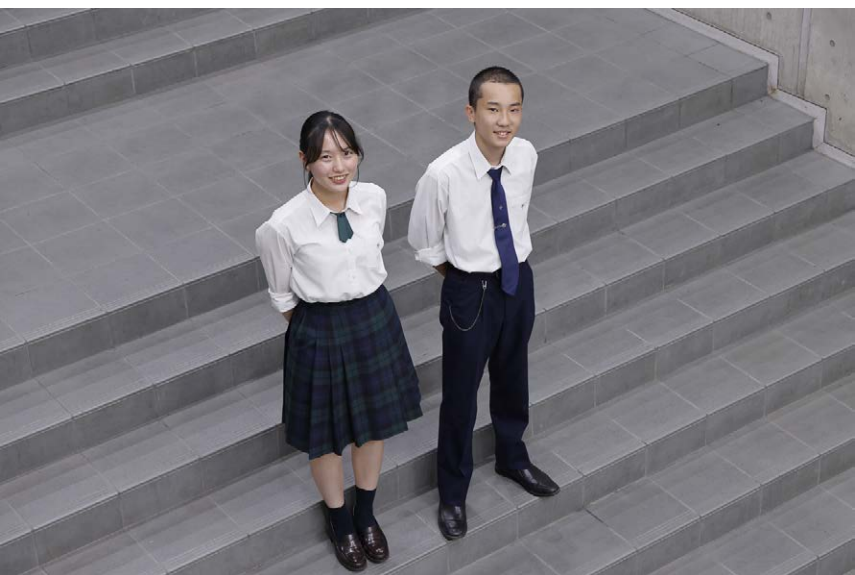
二人のチーム名は「ツルニチニチソウ」。その由来を、谷口さんは「ツルニチニチソウの花言葉は『幼なじみ』。また、花が紫色で、関東学院小学校時代の学年カラーと同じなので、自分達にぴったりだと思って決めました」と話します。地区大会優勝について、岸さんは「神奈川大会が初開催ということで、高校時代の青春の記念に出てみようかなとエントリーしました。それが、あれよあれよと勝ち上がって、気づいたら優勝していました」と振り返ります。



全国大会決勝での谷口さん(左)と岸さん(右)の作品

災害時における行動や備えについて関心を持ちました。大学では異文化理解と防災対策を学び、日常の共助に繋げていきたいです」と意欲を語りました。取材中は笑いが絶えず、ここには書き切れなかった楽しいお話をたくさん聞かせてくれた二人。これからも友情を育み、夢に向かって歩んでいってください。

関東学院高等学校3年 華道部
谷口 宗陽さん
岸 紗加さん



共生デザイン学科の学生がACジャパン広告学生賞で 空き家問題の公共広告を提案して優秀賞を受賞

身近な空き家問題をテーマに授業で制作した作品で広告賞に挑戦し
見事受賞した大学生と指導教員のお二人に話をうかがいました。



受賞作品「放置しないで、さよならを。」

優秀賞を受賞しました。この賞は、若い世代の公共広告への理解と、「公」への意識を

育むことを目的として設立され、学生ならではの自由な視点や発想が選考のポイントとなります。テレビCM部門と新聞広告部門があり、今回は過去最多の応募作品が寄せられました。新聞広告部門に

は734作品の応募があり、八坂さんは34作品のファイナリストに出選され、優秀賞を受賞。今年3月に都内で開催された表彰式に出席しました。

実社会の課題に取り組むプロジェクト科目

八坂さんの作品は、年々深刻化する「空き家問題」を題材とした公共広告です。昨年度の春学期に受講した「プロジェクト科目」において制作しました。プロジェクト科目とは、人間共生学部 of 学生全員が3年生の春学期に受講する授業です。幅広いテーマの中から学生自身が興味のある科目を選択し、社会と連携した実践的な学びを通じて課題に取り組めます。

八坂さんは、共生デザイン学科の小林和彦教授が担当するプロジェクト科目「広告のデザイン」を受講しました。小林教授はその内容について、「実際の公共広告や商業広告の制作に取り組み、企画力、計画性、構成力、制作スキルなどを修得する授業です。コンテストへの応募を推奨しており、新聞広告や交通広告など、



学生自身が応募先を探して、自分が表現したいものと世の中に求められているものとの調和を図ることを学んでいます」と語ります。

家を供養するという発想で 当事者にやさしく寄り添う

空き家は現在全国に約九百万戸あるとされ、そのうち「放置空き家」は約385万戸と年々増加しています。横須賀で育った八坂さんは、空き家問題をテーマとした動機について、「私の住んでいる地

遺影がメインビジュアル 際立つオリジナリティ

授業自体は、学生がそれぞれ制作した広告作品を提出して昨年7月に終了。実際にコンテストに応募するかは学生の任意となります。八坂さんの場合、応募期間が昨年12月から今年1月だったため、終了後もこまめに小林教授とやり取りし、微調整をして応募しました。

小林教授は八坂さんの作品について、「まず、遺影を使うアイデアが良かったと思います。公共広告はどうしても押しつけがましくなったり、メッセージ性の強さだけが際立ってしまいがちです。この作品は、ビジュアルの強いインパクトがあつた上で、メッセージがゆっくり伝わっていくことで、説得力のある広告に仕上がっています。また、空き家は可視化されている問題ですが、その公共広告はま



初期のラフスケッチ

域には空き家がとて多く、老朽化している家を目にすることも少なくありません。不法侵入で治安が悪化するなど様々な弊害があることや、能登半島地震では空き家の倒壊によって救助が遅れたと新聞記事で知ったことも大きかったです」と説明します。

八坂さんが制作したのは、「放置しないで、さよならを。」というタイトルで、管理が行き届いていない空き家の持ち主に解体を提案する広告です。家族の思い出の詰まった空き家の遺影に、手を合わせて供養する様子をビジュアル化。大切な家族と同じように、家も「供養する」「取り壊す」ことをやさしく促しています。また、コピーには、国土交通省の調査で「空き家を放置しておく理由」として上位に挙げられた回答を引用して説得力を高めています。

遺影のアイデアは最初から頭に浮かんだそうで、「空き家を『取り壊す』」というと強烈な印象があると思いますが、人を大切に思う心やお別れしても残る思い出があるように、空き家も過ごした記憶と



関東学院大学 人間共生学部 共生デザイン学科 4年

八坂 琉奈さん



関東学院大学 人間共生学部 共生デザイン学科 教授

小林 和彦

東北芸術工科大学 芸術工学研究科 修士課程修了。
コンピュータを活用した映像表現手法を研究し、
デジタル作品で受賞歴多数。2009年関東学院大学着任。

最後に八坂さんは「私はすぐに周り比べてしまい、あまり自分に自信が持てなかったのですが、今回の受賞で少し自信ができました。将来は習得したグラフィックの技術を活かせる仕事に進みたいです」と笑顔を見せました。関東学院大学は、今後も社会課題の解決を目指し、学生が主体となって取り組む授業を展開していきます。

関東学院大学の料理サークルが有隣堂などと協働して 神奈川野菜を使用した「夏野菜カレー」を販売

神奈川の野菜の美味しさを知ってもらおうと、企業や地域と連携して夏野菜カレーを開発・販売した料理サークル「DELI」の活動を紹介します。

横浜・関内キャンパスを拠点に料理を通じて地域と協働

関東学院大学の料理サークル「DELI」は、横浜・関内キャンパス内で3軒のカフェを運営する「株式会社有隣堂」と、生産者から直接仕入れた旬の神奈川野菜を販売する青果店「濱の八百屋」と連携したカレープロジェクトを展開。神奈川野菜を使用した夏野菜カレーのレシピを開発し、今年7月7日から11日、横浜・関内キャンパス7階カフェスタンドで販売しました。

DELIは2024年4月に関内を拠点として発足。メンバーの親睦を深める料理会やイベント開催のほか、料理を通じて地域や企業との協働を実践しています。昨夏はキャンパス近くの東京ガス業務テストキッチン「厨BO-YOKOHAMA」や、横浜の老舗菓子店「ブチ・



◀ 梨本 結衣さん

▲ 樋口 千代実さん

▶ 滝本 早智さん

フルール」と連携し、地域の小学生を対象に「親子で楽しむスイーツづくり」を開催しました。

サークル代表の梨本結衣さん(経営学部経営学科3年)がDELIを立ち上げたのは大学2年生の春。料理好きの梨本さんは、「関内にはサークル活動をする学生が少ないため、誰もが気軽に参加できる料

クラ、ズッキーニをトッピングするなど、見た目にもこだわりました。価格は税込550円。コクのあるカレーに、素揚げ野菜の甘さと香ばしさがマッチした味わいは大好評で、全日完売となりました。

初日は緊張で一杯だったそうですが、「販売を開始すると、たくさんの人達が並んで買ってくれて、すごく嬉しかったです。野菜が苦手な友人も甘くて美味しいと言ってくれました。準備期間、大変なこともありましたが、挑戦して本当に良かったです」と声を揃えます。有隣堂の担当者からも「こんなに売れるなんてすごいね」とありがたい言葉をいただいたそうです。今回の成功を受けて、8月、関内でのオープンキャンパスで来場者を対象に夏野菜カレーを販売することも急遽決定。新たな活動へと繋がっています。

培った企画力や行動力を活かし 今後も人や地域と関わる活動を

現在、DELIの在籍メンバーは53名。料理初心者も多く、男女比はほぼ半々です。全員で年間計画を話し合い、様々な企画にチャレンジするため、料理に興味がある人はもちろん、大学生活で自らイベントを企画して運営してみたい人にもぴったりのサークルです。

最後に、これまでサークルを引っ張ってきた3人に今後の目標を聞きました。梨本さんを支えてきた樋口さんは、「小さい頃からイベントを企画することが好きで、DELI以外にも学祭の実行委員など

理サークルを作りたいと思い、友人である二人に相談しました」と振り返ります。相談を受けたのは樋口千代実さんと滝本早智さん(ともに人間共生学部コミュニケーション学科3年)です。樋口さんは、「今は一人暮らしなので、料理を通して意見交換できたらと思いましたし、自分が学ぶ関内のキャンパスで活動できることに魅力を感じました」と賛同。滝本さんも、「新型コロナウイルスが流行していた頃、自宅で親と一緒に料理をする機会があり、料理に興味を待ち始めていたので参加しました」と語ります。

レシピ考案の夏野菜カレーを キャンパス内で期間限定販売

高校時代から「地域」に興味があった梨本さんは、進学を機に暮らし始めた横浜の人達と関わり合いながら成長してい

を務めています。就職活動も『人を笑顔にする仕事』にこだわって活動していますし、これからも日常を忘れて楽しめるようなイベントを提供していきたいです」と意欲を語りました。

仕入れから販売までの予算管理を担ってきた滝本さんは、「私もこれまでDELI以外に、学生メンターや『関キャン・フェス』などのボランティア活動に携わり、どんな地元神奈川が好きになりましたし、卒業後も神奈川で働くことを軸にし



関東学院大学 公認サークル「DELI」

代表 梨本 結衣さん(経営学部経営学科3年)

樋口 千代実さん(人間共生学部コミュニケーション学科3年)

滝本 早智さん(人間共生学部コミュニケーション学科3年)



DELI 特製「夏野菜カレー」



きたいという思いがあり、大学職員に相談したところ、様々な制度があることをアドバイスされたそうです。今回のカレープロジェクトでは「チャレンジ奨学生」を申請し、料理を通じて地域貢献や、自主性・計画性・実行力など社会で通用するスキルを身につける意義を訴えた結果、

ていきたいです」と笑顔を見せます。そして代表の梨本さんは、「高校の時から地域というものに根ざして、自分で興味を追求してきました。卒業後も人々の生活に携わる仕事、なかでも不動産業界でまちづくりをしたいという目標を持っています」と滄刺と語りました。

社会連携教育を推進する関東学院大学は、今後も授業以外の大学生活においても、自らの意志で地域との協働に取り組む学生の活動をサポートしていきます。

新たな住民ネットワークを構築する拠点として 学生が企画運営する喫茶店「関学珈琲館」がオープン

関東学院大学法学部の木村乃教授のゼミナールが、横須賀市浦郷町で町内会の機能を補完するコミュニティづくりに挑戦しています。

既存の枠組みにとられない
地域コミュニティを探究

関東学院大学法学部の学生が運営スタッフを務める喫茶店「関学珈琲館」が横須賀市浦郷町に今年3月オープンしました。

人口減少や高齢化という社会問題を背景に、全国の自治会・町内会が加入率の低下、担い手不足などの課題に直面しています。浦郷町が所在する追浜地区は、横須賀市の中でも高齢化が進んでいる地区の一つです。地域コミュニティの存続が厳しくなる中、同町の榎戸町内会が、法学部地域創生学科の木村乃教授に相談を持ち掛けたことを発端に、町内会の機能を補完するコミュニティを研究するプロジェクトが始動。木村ゼミナールの学生達が話し合い、住民同士が気軽に交流し、新たな住民ネットワークを構築する



ための実践研究拠点として企画されたのが関学珈琲館です。

木村教授は「企画を考える中で、町内会という従来の枠組みにこだわらず、デジタルネットワークで住民同士が緩やかに繋がることで、持続的なコミュニティが生まれるのではという案が出てきました。その拠点として、学生自身が喫茶店を運営することを決めました」と経緯を語ります。



グラニンの暖簾が目印



店員を務める学生達

地元住民と信頼を築きながら
公式ラインアカウントを運用

現在は週一日程度の不定期営業で、メニューはコーヒーと紅茶を提供しています。学生達はシフトを組んで在店し、来店者とコミュニケーションを取って関学珈琲館の公式ラインアカウントへの登録を促しています。注目すべきは、不特定多数に広く呼び掛けて登録者数を増やすのではなく、来店者一人ひとりに趣旨を説明した上でアカウント登録をしていた点です。信頼を築きながら徐々に輪を広げることで、町内会の役割を補完ひいては代替する機能を持つネットワークの構築を目指しています。今年6月末時点の登録者数は61名。木村ゼミナールは、町内会に加入している世帯数(住民数)を超えることを一つの目標に掲げるとともに、そこからコミュニティがどのように広がっていくかを検証して、新たな可能性を探っていきます。

学生のアイデアと行動力で
地域創生の輪を広げる

プロジェクトに携わる学生達に話を聞きました。高橋冨介さん地域創生学科4年は、「僕達が狙っているのは、特定少数の人達から地域ネットワークの輪を広げていくことなので、単発のイベントではなく、定期的に開けて会話がしやすい喫茶店というアイデアに行き着きました。就職先が地域と密接に関わる職種なので、

このゼミナールで人との関わり方を学べることはすごく良い経験になっています」と語ります。

真野幹大さん(地域創生学科4年)は、「開店に向けて様々な喫茶店を見て廻り、店主にヒアリングをして準備を進めました。準備段階から町内会のイベントに参加して、温かい町であることはわかっていましたが、実際にどんな方が来店してくれるかなど最初は不安もありました」と振り返ります。

公式アカウントの運営を担当する田中歩陽さん(法学科4年)は、「営業日時やイベント告知などをラインで配信しています。また、多くの方に足を運んでいただけるよう、曜日を変えて営業するようにしています。今はご高齢のお客さんと話すことが楽しいです。このゼミナールは自分達で主体的に考えて行動できることが魅力です」と話します。

現在はコミュニティハウスだった頃からの常連客が多く、年齢層も高めとのこと。今後は来店者の幅を広げていくことも課題です。長田琢さん(地域創生学科4年)は、「来店のきっかけ作りとして、6月は高齢者向けのスマホ教室、8月には『こども店長体験』などのイベントを実施しました。金融業界への就職が内定しているのですが、いろいろな人と交流して地域活動ができたことは今後の仕事に繋がると思います」と語りました。

また、脇田菖吾さん(地域創生学科3年)は今後の見通しについて、「現在の客層も大事にしつつ、子育て世代や、町内会に

実社会で事業計画を実践し
未来へのステップに

地域政策を実践的に学ぶ木村ゼミナール



関東学院大学 法学部 地域創生学科 教授 木村 乃

木村 乃

1989年京都大学法学部卒業後、シンクタンク等を経て2003年度より5年間の任期で神奈川県三浦市役所の政策経営担当の役職を歴任。2010年度より明治大学商学部特任准教授、2018年度に関東学院大学法学部地域創生学科着任。

ルは、関学珈琲館以外に、群馬県上野村をフィールドとしたプロジェクトも進行中で、住民との交流を通じて課題解決に取り組んでいます。最後に木村教授に学生達に学んでほしいことを聞きました。

「地域活動というのは一筋縄ではいきません。やりたいことがそのままできるわけではない社会の複雑さに触れながら、課題に取り組んでほしいですね。もう一つは、事業をゼロから戦略的に企画し、実行して修正していく、いわゆるプロジェクト・マネジメントを社会に出る前に経験することです。本学の推進する社会連携教育にも繋がると思います」

地域の課題解決に取り組む関学珈琲館の活動に今後もし注目ください。



左から真野幹大さん、高橋冨介さん、木村乃教授、田中歩陽さん、長田琢さん、脇田菖吾さん

空飛ぶクルマを活用した新たな災害救助を提案し 建設コンサルタツ協会「学生懸賞論文」特別賞受賞

関東学院大学・大学院で都市防災学を専攻する学生達が
空飛ぶクルマを使った孤立集落の解消案で高い評価を受けました。



関東学院大学大学院 工学研究科
修士1年 保坂 邦彦 さん
修士2年 佐藤 慎慈 さん

能登半島地震を例に 斬新な防災対策を提案

土木系の研究室に所属する大学院生と大学生が共同執筆した論文が、一般社団法人建設コンサルタツ協会「2024年度学生懸賞論文」特別賞を受賞しました。執筆に取り組んだのは、佐藤慎慈さん(大学院工学研究科修士2年)、保坂邦彦さん(同1年)、松田蒼生さん(大学理工学部土木・都市防災コース今春卒業)です。

3人は都市防災学を専門とする鳥澤一晃教授の研究室で学び、自然災害時における構造物やインフラの物理的・機能的被害、及びそれに伴う社会への影響について、AIを活用して予測し、防災・減災に役立てる研究をしています。今回の論文は、鳥澤教授から懸賞論文の話を聞いた大学院生の佐藤さんが、チャレンジしようとして、当時大学生だった後輩二人

を誘ったのがきっかけです。昨年9月に応募し、今年4月に審査結果が発表されました。

論文テーマは、「未来を生きる若者達が思い描く社会のカタチ」と銘打って提示された複数の候補から、『安全・安心を実現するための防災・減災対策とは?』を選択。このテーマは、昨年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」の記憶も新しい中、社会資本整備インフラ整備の観点から、どのような技術や制度が必要か、学生独自のアイデアから考察し提案することが求められます。

3人が提案したのは「災害時の孤立集落救出に向けた空飛ぶクルマの活用」です。論文の内容が決まらず行き詰まっていた時に、松田さんが空飛ぶクルマについて何気なく言及したのできつかけに、これまでにない新たな移動手段として着目。災害時の孤立集落の早期解消に役立

価され、特別賞受賞に繋がりました。

安全・安心なまちづくりに 貢献していきたい

執筆者のうち、現在大学院で学ぶ佐藤さんと保坂さんに話を聞きました。

岩手県大船渡市出身の佐藤さんは、小学生の時に東日本大震災で被災し、震災後の瓦礫や復興の様子を間近で見つめ、防災に興味を持ちました。今回の論文について、「この懸賞論文は、柔軟な発想でよいとのことだったので、まだあまり研究が進んでいない空飛ぶクルマの活用を提案しました。今回はアメリカの企業が開発した空飛ぶクルマのスペックで検証したのですが、アメリカと日本では地形や気象条件も異なりますし、社会実装にはまだまだ検証を要すると思います。一方で、無人運行や夜間運行の可能性も含め、将来的に実用化される見込みは十分にあると感じます。修了後は建設コンサルタツの仕事に就きますが、防災を含

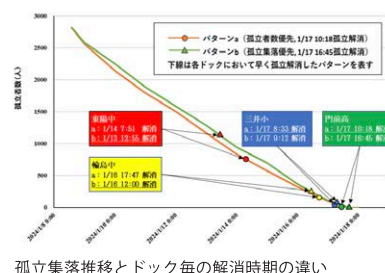


めて、住みやすく平和なまちづくりの一助になれたらと思います」と語りました。元々まちづくりに興味があった保坂さんは、土木が果たす重要性を知り、土木学系を専攻しました。論文については、「最初は空飛ぶクルマについて全く知識がない上に、実際に法整備や制度設計がどう進むかわからない状態だったので、難しい面もありましたが、ヘリコプターと比べた場合の優位性に着目して検証を進めました。日頃の研究とは異なる作業で新鮮でしたし、受賞メールが届いた時は素直に嬉しかったです。将来は自然災害に強いまちづくりに携わりたいと思います」と振り返りました。

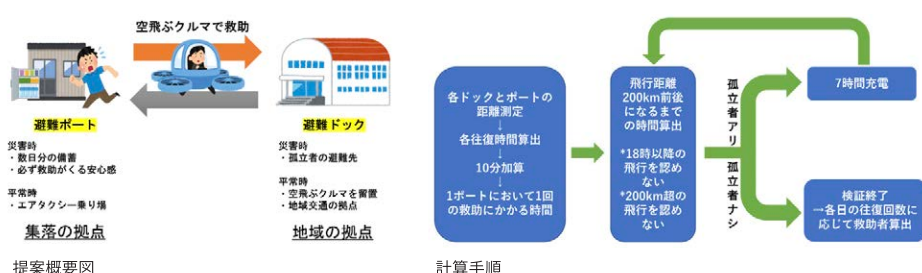
ちなみに特別賞の副賞として贈られた3万円は、「3人で割った」とのこと。それ以上に、チャレンジすることの楽しさや自信を得たことが大きな糧となりました。これからも活躍に期待しています。

孤立解消までの時間を 日頃培った解析力で検証

論文ではまず、大規模崩落等により陸路での支援が困難だったことや、限られた道路に支援車両が集中して渋滞が発生したことなど、能登半島における道路ネットワークの課題を指摘。ヘリコプターによる空路からの対応も行われたものの、平地の少ない地形や、孤立集落にヘリコプター着陸可能な場所が少ないことから、結果として孤立期間が長期化したことにも触れました。



孤立集落推移とドック毎の解消時期の違い



計算手順

提案概要図



3人とも学外への提出を前提とした論文を書いたのは今回が初めてで、鳥澤教授からは論文の体裁や、複数のパターンに分けて検証することなど多くの助言をもらったそうです。審査では、災害時の迅速な対応策として将来性が感じられることや、孤立者数の推定や救助時間についての詳細なシミュレーションが高く評

関東学院大学卒業生のプロボクサー本多俊介選手 全日本新人王決定戦ライト級で優勝

ライト級期待の新人
目指すは世界王者

関東学院大学卒業生でプロボクサーの本多俊介選手(ライト級)が、昨年12月21日に後楽園ホールで開催された「第71回全日本新人王決定戦」で優勝しました。この大会は、東日本と西日本、それぞれの新人王トーナメントを勝ち抜いた代表選手12階級が日本一をかけて対戦する、「世界王者への登竜門」として知られる大会です。

ライト級の東軍代表として出場した本多選手は、満員の観客が見守る中、西軍代表の堤啓至選手を相手に3回テクニカルノックアウトで勝利。全日本新人王を獲得するとともに、日本ランキング入りを果たした



全日本新人王と東日本新人王のトロフィー

した。

横浜で生まれ育った本多選手がボクシングと出会ったのは高校3年生の時。お父さんの知人がトレーナーだったことが縁で、ジムに行つて体験したのが始まりです。運動神経に自信があったことに加え、「若いうちにはできないことをやりたい」との思いから、すぐに夢中になり、早くもこの時点でプロになろうと決めました。「リングに上れば1対1の勝負の世界。自分が主役になれることも魅力ですね」と話します。

大学では国際文化学部比較文化学科で学び、「ゼミ室によく通っていて、高井先生にはすごくお世話になりました」と振り返ります。大学に通いながらトレーニングを積み重ね、2021年にプロテストに合格。翌年デビュー戦を飾り、現在までの戦績は8戦全勝です。昨年には金沢区幸浦にある株式会社大松運輸でアスリート社員として勤務。早朝から配送の仕事をこなし、9時頃に帰宅して1時間ほどランニング。昼食と休憩を経て、夕方からジムでトレーニングをしています。

すらりとした長身が印象的な本多選手。ライト級で182cmの選手は珍しく、長いリーチを活かした攻撃だけでなく、接近戦にも強いのが特長です。また、勝つだけ

でなく、観客に楽しんでもらえるような「魅せる動き」も常に意識しています。今回の優勝ではメンタル面でも進化を実感したそうで、「練習でやっていることが必ずしも試合で当てはまらないというのは、ほとんどのアスリートが直面する問題だと思います。でも、この大会では自分の持ち味を引き出す試合勘のようなものが掴めた気がします」と語ります。

現在25歳ですが、「今後はより強い相手と試合をしてランキングを上げ、28歳までに



関東学院大学 国際文化学部 比較文化学科 卒業生
プロボクサー

本多 俊介 選手

E&Jカシヤス・ボクシングジム所属
2000年1月神奈川県横浜市生まれ。
2022年7月プロデビュー。2024年全日本新人王。
ライト級(61.23kg以下)で現在8戦8勝。
今年6月時点で日本ランキング11位。

関東学院六浦高等学校 女子ラグビー部が サニックスワールドラグビーユース交流大会で初優勝

充実した戦いぶりで
国際大会で初の栄冠

昨秋、全国U18女子セブンズ(7人制)で2連覇を達成した関東学院六浦高等学校女子ラグビー部。今年4月には福岡県で開催された「サニックスワールドラグビーユース交流大会」に出場し、国際大会では初となる優勝を果たしました。この大会は高校生世代の国際大会で、男子は15人制、女子はセブンズで実施します。女子セブンズは4月28日・29日の2日間にわたり、国内と海外から4チームずつ、計8チームで競いました。3回目の出場となる関東学院六浦は、予選から全勝で決勝に進出。決勝では強豪の四日市メリノール学院高等学校に対し、前半を12点リードで終え、後半開始早々に主将の浅利那未選手(高3)がトライを決めて試合を決定づけました。浅利主将は、「昨年は3位に終わりますごく悔しい思いをしました。その気持ちをバネに、次こそはと頑張ってきたので、優勝できてとても嬉しいです。新チームで臨んだ大会でしたが、初日で見つかった問題点も皆でしっかりと修正して、最後は良い試合ができました」と振り返ります。



左から青山羽葉さん、浅利那未さん、伊藤ちひろさん、梅原光先生



決勝でトライとゴールキックを決めた青山羽葉選手(高3)は、「去年は悔しい結果に終わり、今年がラストチャンスだったので、最後に笑って終われて良かったです。海外選手と戦える大会でもあり、フィジカルが強い相手に対する対策を皆で練習して、試合でしっかりと出せたことが結果に繋がりました」と話します。また、チームの司令塔である伊藤ちひろ選手(高3)は、「こ

の大会で私達はチャレンジャーでしたが、全国2連覇してきたチームとして、全ての試合で相手を圧倒したいという強い気持ちで臨みました。新チームになって初めての大会で、思うようにいかない部分もありましたが、最後はしっかりと自分達の流れに持つていき、走り勝てたことは大きな自信になりました」と手応えを述べました。

今年で26回を数える同大会は、国内外の大会で私達はチャレンジャーでしたが、全国2連覇してきたチームとして、全ての試合で相手を圧倒したいという強い気持ちで臨みました。新チームになって初めての大会で、思うようにいかない部分もありましたが、最後はしっかりと自分達の流れに持つていき、走り勝てたことは大きな自信になりました」と手応えを述べました。

語ります。

高校ラストイヤーになる3人は、「もちろん3連覇が目標ですが、もう一つ、私達は『温かいチーム』であることを大切にしています。上下関係がないのがこのチームの魅力ですが、ただ仲が良いのではなく、学年を超えて自由に意見し合えるように、上級生である私達が大きな心で迎え入れ、チームとして成長していきたいです」と爽やかに語りました。これからも同校女子ラグビー部の活躍にご期待ください。

関東学院テーマ募金第6期のご案内

2013年4月に創設した「関東学院テーマ募金」も第6期を迎えます。

大学では教育・研究活動、学生支援の目的別に、各校・各園においては特徴的な教育活動、

長期的な資金準備が必要なテーマを掲げ、ご支援を募っております。

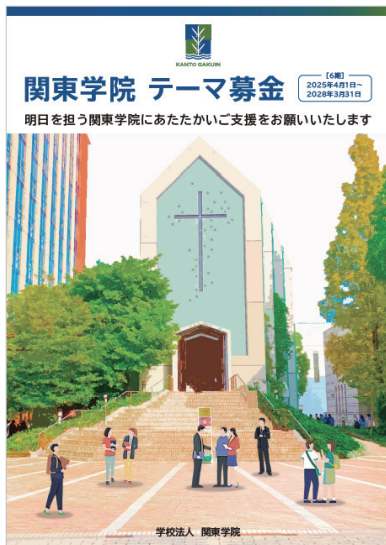
皆さまからの篤志により、取り組みを進めさせていただくとともに、校訓「人になれ 奉仕せよ」のもと、人と社会に、そして未来と幸福に貢献できる、愛に溢れた人材を育成していく所存です。

● 募金対象者

卒業生、保護者、教職員、同窓会、企業、団体

● 募金期間

2025年4月1日から2028年3月31日までの3年間で寄付はクレジット、ペイジー、コンビニ決済での支払いに加えてPayPay決済の寄付も出来るようになりました。下記のQRコードよりお申込みが可能です。



Web芳名録について

テーマ募金へ10万円以上の寄付者には、寄付ホームページへWeb芳名録として掲載させていただきます。Web芳名録は、関東学院テーマ募金の期ごとに掲載いたします。(2025年10月掲載予定)

税制上の優遇措置について

学校法人関東学院に対する寄付は、特定公益増進法人への寄付金として、寄付金控除の措置を受けることができます。

※入学(園)された年内に新入生保護者及び新入生が寄付された場合は、

「入学に係わる寄付金」とみなされて寄付金控除の対象になりませんので、ご注意ください。

関東学院テーマ募金 お問い合わせ

学校法人関東学院 募金・校友課
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-2685
FAX 045-786-5729
Mail bokin@kanto-gakuin.ac.jp

